

～旧約聖書を読んで感じること～ (47) サムエルの母ハンナの祈り



サムエルを捧げる Samuel Topham

ハンナの誓いを込めた祈りが聞かれ、男児が誕生しました。ハンナは主に願って得た子どもなので、サムエル(その名は神)と命名しました。彼女は誓いを果たすべく、乳離れするまで手元で懸命に、ナジル人として、サムエルを育てました。

サムエルは神が与えて下さった人間、一生神に仕える人間として、ハンナに養育されたでしょう。サムエルは神が祈りを聞いてくださる方であることを確信し、神と共に生きる人間であれば、自分も祈りを聞く人となろうと願ったのではないのでしょうか。やがてその日がやってきました。ハンナは三歳の雄牛一頭、その他、盛大な生贄を携えてサムエルを神殿に連れて行きました。「わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です。」(サム上1:28)と言って祭司エリに託しました。神殿と云われていますが、「契約の箱」が置かれている幕屋であったと思います。そこでハンナは祈りを捧げました。このハンナの祈りは主イエスの母マリアの賛歌と対比されています。

ハンナの祈りの最初の部分は、マリアの賛歌「私の魂は主をあがめ、私の霊は救い主である神を喜びたたえます」と同じく「主にあってわたしの心は喜び／主にあってわたしは角を高く上げる。」と述べると同時に「私は敵に対して口を大きく開き／御救いを喜び祝う。」とも歌っています。

次の3節の部分がハンナの真骨頂ではないかと思うのですが、「驕り高ぶるな、高ぶって語るな。思い上がった言葉を口にしてはならない。主は何事も知っておられる神／人の行いが正されずに済むであろうか。」というものです。ハンナの敵こそ、子を持つ故に勝ち誇って苦しめたペニナのことでしょう。けっしてペリシテ人ではありません。これまでのペニナへの鬱積した思いが怒りを込めて付け加えられています。

マリアの賛歌では「主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし」と穏やかな言葉で、驕る者を認めない神を褒め称えているのとはずいぶん違います。そして、マリアの「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます。」と同じく、ハンナも「弱い者を塵の中から立ち上がらせ／貧しい者を芥の中から高く上げ」と自分のような哀れな者を主は救われると感謝しています。

更に、ハンナは「高貴な者と共に座に着かせ／栄光の座を嗣業としてお与えになる。」と勝利の栄光をも望んでいるのです。マリアはつつましく「その僕イスラエルを受け入れて、／憐れみをお忘れになりません」と主の憐れみを述べていますが、ハンナはあくまでも「主の慈しみに生きる者の足を主は守り／主に逆らう者を闇の沈黙に落とされる。人は力によって勝つのではない。主は逆らう者を打ち砕き／天から彼らに雷鳴をとどろかされる。」と主の裁きを述べているのです。

雪辱の日を願う、不屈の精神を持つハンナの祈りが士師として働くようになるサムエルを育てたのでしょう。ハンナは毎年シロに生贄を捧げに来るたびにサムエルに上着を縫っては、届け、愛を注ぎました。ハンナはその後、息子3人、娘2人を恵まれたと記されています。